1. 古代の戦闘技術

人類の歴史と戦争の黎明

人類がいつ頃から戦争を始めていたかについては、様々な議論があり、いまだはっきりとした結論は得られていません。しかし、人類が自身の過去を記録する以前、すなわち先史時代から、すでに人間同士での戦闘あるいは戦争が始まっていたことはほぼ確実です。例えば、1990年代にドイツのシェーニンゲンから先史時代の槍が出土しましたが、これは狩猟具と武器の両方の性質を持っていました。

先史時代の出土品からは、狩猟具と武器を判別することは困難です。一方で、前近代に世界的に使用された武器の多くは、狩猟や伐採などに用いた道具から発達したことは、疑いようがありません。人類は道具を、最初は自身の生活に用いていましたが、まもなくその刃を同じ人間にも向けるようになったのです。

紀元前3000年頃を境に、ユーラシア各地で大河を中心とした地域に文明が生じます。これらの地域では、おもに農耕地帯の争奪が戦争の原因となることが多かったようです。その一例が、メソポタミア（現在のイラク）の都市国家であるラガシュとウンマの一連の戦争です。この2つの都市国家は、グ・エディン・ナと呼ばれた肥沃な一帯をめぐって断続的に争い、その期間は200年近くにも及ぶとされます。

このラガシュの王であったエアンナトゥム（位前25〜前24世紀頃）は、「禿鷲の碑」という石碑を残しており、これが現存する最古の戦争の記録とされます（図2）。また、同じくメソポタミアで出土した「ウルのスタンダード」という工芸品には、「戦争の場面」と呼ばれる面に、兵士やチャリオット（戦車）が描かれ、当時の軍隊の様子が窺えます（図3）。

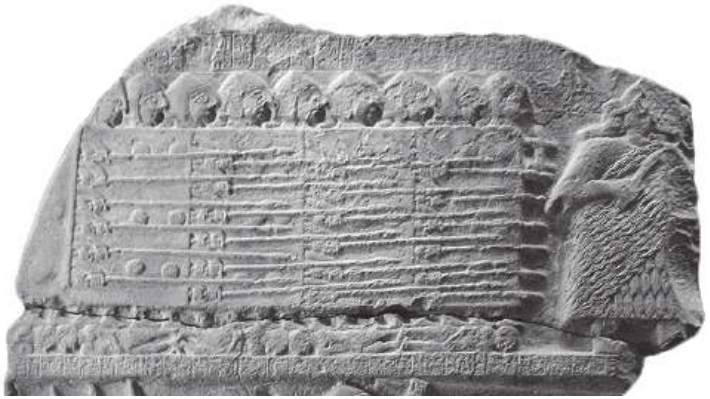

図2　「禿鷲の碑」におけるシュメール兵の描写

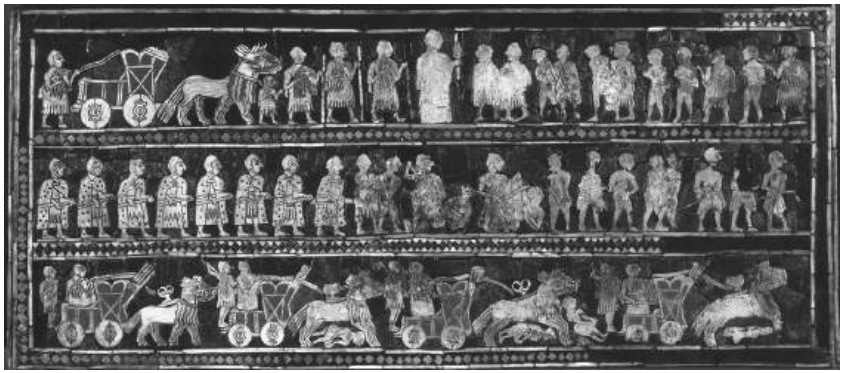

図3　「ウルのスタンダード」における「戦争の場面」
ウルの前2600 年頃の王墓より出土し、現在は大英博物館が所蔵している。片面に戦争、反対側に平和（饗宴）の場面がそれぞれ描かれており、「戦争の場面」では中段左に歩兵、下段に 驢馬に引かせたチャリオット（戦車）が描かれている。

戦争の発生とともに見逃せないのが、都市などの要塞建築です。一部の例外を除き、ユーラシア各地では古代より周囲を城壁で囲った「都市」が登場します。この都市、より厳密には城郭都市の出現は、これらの都市が位置する地域が、恒常的な戦闘状態に置かれていたことを仄めかします。そしてこの都市国家こそが、世界史における国家の最初期の形態でもあるのです。都市国家の形成と戦争は、切っても切り離せない関係にあったと考えられるでしょう。

前1457

メギッド

詳細に記録された初の戦争

背景

紀元前15世紀、エジプトは大国への道を着実に歩んでいました。当時のエジプトは新王国と呼ばれる時期にあり、前16世紀にヒクソスという異民族を排除してエジプトを再統一して以来、歴代の新王国時代のファラオ（エジプトの君主）は積極的な対外膨張に勤しみました。例外だったのが女王ハトシェプスト（位前1479/8 頃～前1458 頃）の治世で、彼女に次いでファラオに即位したのが、トトメス3世（位前1479～前1425）でした。

トトメス3世が即位した当時のエジプトでは、ミタンニ王国（ミッタニないしハニガルバト）を後援とするシリア・パレスティナの都市国家群が、エジプトに対し反抗の意を露にします。元来、シリア・パレスティナの都市国家群はエジプトの支配を受けていましたが、先代のハトシェプストが外征を控えたことで、その離反が加速したのです。そこで、トトメス3世は外征を決意します。トトメス3世は、まずエジプト本土と接するパレスティナ南部、カナーン人の都市国家を標的に定めます。カナーン人の都市国家の一つであったカデシュの王が、同じ都市国家のメギッドに軍を進めていたためです。トトメス3世は、カデシュの軍をメギッドから排除することで、シリアへ北上するための拠点を築こうと考えます。同時に、ここでカデシュとメギッドの連合軍に勝利することで、カナーン人諸都市の帰順をも狙います。

トトメス3世はその在位中に17回の外征を敢行しましたが、今回のメギッドへの遠征では、その初期でありながら最大の戦闘が展開されるのです。

戦力と経過

この遠征とメギッドの戦いは、信頼に足る詳細な記録が残されていることでも知られています。トトメス3世は戦後にこの遠征を、カルナークのアモン・ラー神殿に碑文として刻むよう命じたからです。

トトメス3世率いるエジプト軍は、チャリオット（戦車）を含め1～2万人の規模であったといい、対するカデシュを中心とするカナーン連合軍は、エジプトと同程度の1万5000人ほどであったと記録されています。

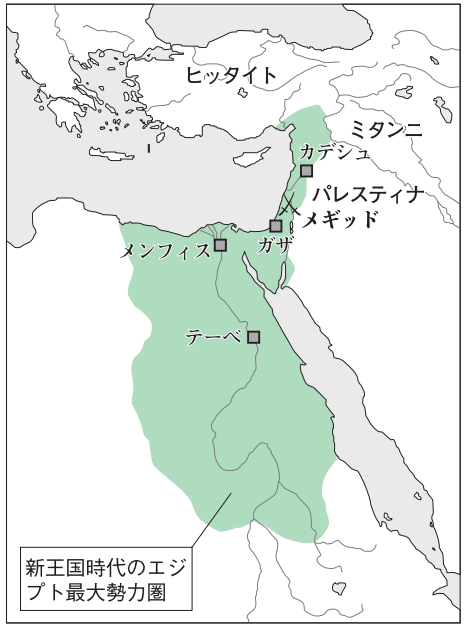

図4　前15世紀のエジプト

カデシュ王は周辺のカナーン人首長たちを呼び集めて、自身の軍とともにメギッドに入城します。一方、トトメス3世はエジプト本国の国境近くに位置するジャルの要塞（現在のスエズ運河の東岸付近）を出立し、友好都市ガザを経て、メギッドにほど近いイェヘムまでの道のりを踏破します。メギッドは堅固な城塞都市でしたが、カナーン連合軍はイェヘムからメギッドへの道が限られていることから、エジプト軍の行軍ルートを予想し、これを待ち受けます。トトメス3世もこれを百も承知で、メギッドへの道を進むことにしたのです。

イェヘムに陣を張ったトトメス3世は、ここで幕僚とともに軍議を開きます。エジプト軍の陣地からメギッドまでの道は全部で3つあります。北の道はヨクネアムを経由し、南の道はタナアクを経由するもので、中央の道はまっすぐにメギッドへと通じる道です。北の道と南の道は、どちらも距離はやや長いものの道幅が広く、また終着点が渓谷であることから、途中で奇襲を受けにくいという特徴があります。一方で中央の道は、距離は南北の道に比べ短

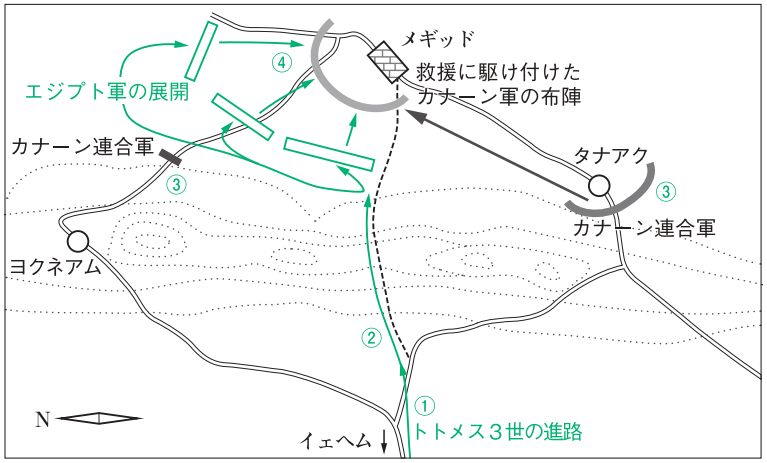

図5　メギッドの戦い

いですが、道幅が狭い峠道で、奇襲を受けるリスクもあります（図5）。

決戦の選択1　南北の幅が広い道を通って迂回するか、中央の幅が狭い道を進軍するか？

トトメス3世の将軍たちは、安全な北か南の道を採用するよう進言します。しかし、トトメス3世はこれを一蹴します。安全な北か南の道を通ることは、カナーン連合軍がまさに期待していることであり、どちらも恐らく大軍が配備されているだろうと反論します。対して、中央の道は大軍が移動するには不便だからこそ、敵も油断しているに違いないと、トトメス3世は判断します（①）。これが、彼の「決断」でした。

トトメス3世の決断　奇襲のリスクを承知で、中央の幅が狭い道を選択した。

軍議を解散すると、トトメス3世は早速行軍を開始します。彼の予想はものの見事に的中しました。エジプト軍は全軍の移動に約半日を要しましたが、それでも兵士一人たりとも失われず、峠道を抜けた先は完全に無防備でした（②）。カナーン軍のほぼすべての兵が、北のヨクネアムと南のタナアクでエジプト軍を待ち受けていたのです（③）。

エジプト軍がメギッドの手前に到達したことを知ったカナーン軍は、すぐさまとって返しましたが、陣形を整える十分な時間もないまま、エジプト軍のなすがままにされます（④）。なかでもエジプト軍のチャリオットは、その機動力を存分に発揮して、カナーン軍に甚大な損害を与えます。カナーン軍の裏をかいて奇襲に成功したトトメス3世は、メギッドの城外で大勝利を得ました。

結果と影響

城外で大勝利を得たトトメス3世でしたが、このときエジプト兵がカナーン軍の設営地で略奪に及んだことで、カデシュ王とメギッド君主を取り逃がし、またメギッドの守備隊に城門を閉じる時間を与えてしまいました。このため、メギッドはその後7ヵ月に及ぶ包囲の末、ようやく陥落します（ちなみにこの包囲戦でも、カデシュ王は辛くも逃亡します）。

ともあれ、このメギッドの戦いでのトトメス3世の勝利により、エジプトはシリア・パレスティナにおいて確固たる拠点を築くことに成功します。トトメス3世はメギッドの戦いを戦略に位置付けることも忘れませんでした。彼はこの勝利を詳細に記録することで、国内外に対しエジプトおよびトトメス個人の威光を示すプロパガンダとしたのです。

実際、メギッドの戦後にバビロニアやヒッタイトなど当時のオリエントの大国は、こぞってエジプトに使節を派遣し貢物を献上したほどです。トトメス3世在位中の17回にわたる外征により、エジプト新王国はオリエントの超大国としての地歩を固め、最終的に古代エジプトの最大領土を実現させるのです。

メギッドの勝利を最高潮とするトトメス3世の遠征は、古代における殲滅と攪乱の好例であり、政治的な意思決定も交えた戦略が、よく反映された軍事行動だったと言えるでしょう。

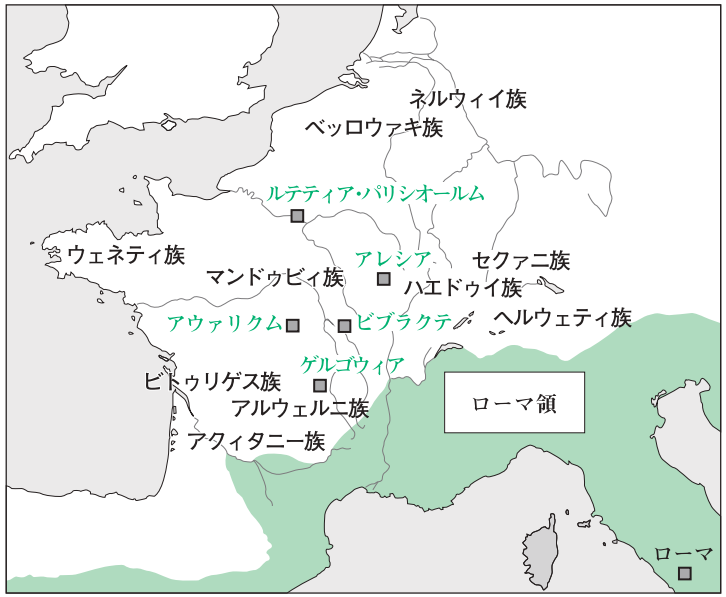

図11　前52年頃のガリアの主要部族と拠点

した。とはいえ、ガリア人はその勇猛さで知られており、建国期よりしばしばローマ領を脅かす脅威でもあったのです。カエサルは、このガリア全土の征服を目論み、前58年に遠征に出立します。このカエサルによる一連の遠征は、ガリア戦争と呼ばれます（～前51）。

6年の遠征により、カエサルはガリアに着実に地歩を築き、またライン川を越えてゲルマン人を撃退し、ブリタニア（大ブリテン島）にも兵を進めるなど、活発な攻勢を展開しました。しかし、カエサルの攻勢はガリア諸部族の危機感を募らせ、ついに前52年にアルウェルニ族の族長ウェルキンゲトリクスを指導者に、ガリア広範の諸部族が連合軍を結成したのです。それまで統制の取れなかったガリア諸部族は、優れた指導者であったウェルキンゲトリクスの指揮の下で、焦土戦やゲリラ戦を展開しローマ軍を苦しめます。

対するカエサルも、ビトゥリゲス族の主邑（しゅゆう）アウァリクム（現ブールジュ）の攻略に成功します。続いてウェルキンゲトリクスの立て籠もるゲルゴウィアに兵を進めますが、長らくローマの同盟部族であったハエドゥイ族が、ウェルキンゲトリクスに接近しようという動きをカエサルは察知し、カエサルはゲルゴウィアの包囲を断念します。ウェルキンゲトリクスはこれを好機と捉え、カエサルを追撃しますが、逆にカエサルに撃退され、マンドゥビィ族の拠点アレシア（現アリーズ・サント・レーヌ近郊）に逃げ込みます。

カエサルはアレシアを包囲し、ここでウェルキンゲトリクスに対して決戦を挑もうと「決断」を下します。ここに、アレシア包囲戦が始まるのです。

兵力と包囲網の構築

アレシアに逃げ込んだウェルキンゲトリクスをはじめ、籠城するガリア軍は約8万人であったといいます。一方、包囲するローマ軍は約6万人でした。アレシアは2本の川の間に位置する高台に築かれた天然の要害であり、大軍をもってしても容易には攻略できません。しかしカエサルは、8万の兵力を維持しようとすればアレシアの兵糧はすぐに底をつくだろうと判断し、疲弊と消耗を待つため包囲網の構築を進めます。

包囲網が完成する前に、ガリア籠城軍の騎兵団がローマ軍を突破し、救援を要請しようとアレシアを後にします。カエサルは救援軍の合流を懸念し、内と外の両方に向けた包囲網の建設を急ぎます。まさに時間との勝負です。

決戦の選択3　包囲を継続するか、救援軍への対処を優先するか？

こうして、総延長28kmにも及ぶ包囲網が構築され、ローマ軍はこれを約3週間という短期のうちに仕上げます。この包囲網については、カエサル自身が記した『ガリア戦記』にも詳細に記録されており、また一部物証も発掘されています。『ガリア戦記』などを頼りに再現した構造物は、以下のようになります（図12）。

まず、アレシアの周囲に7つの陣営を設け、さらにこれらの陣営を高さ4mの土塁でつなぎ、合計23の塔を建てて監視と防御機能を補強します。また、

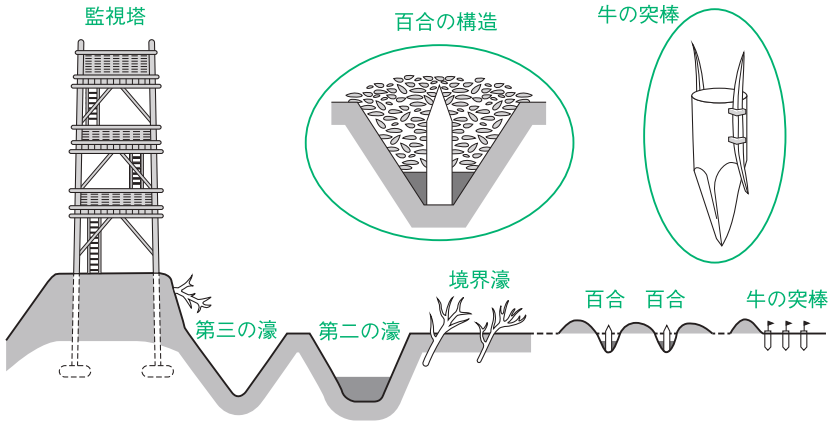

図12　封鎖施設の構造
カエサルはこの封鎖設備を自陣地の内側と外側の両方に設営するよう命じた。

アレシアの西側に、2本の川を結ぶ壕を掘り、包囲網の内側と外側にもそれぞれ空堀を設けます。

さらに、2列の壕の手前には、深さ1.5mの壕が5列掘られ、底には引き抜けないように根元を結び合わせた逆茂木を並べます。これは「墓標 cippi」と呼ばれます。「墓標」の手前には、1m間隔でサイコロの「5」の目のように、深さも1mの落とし穴を掘ります。この落とし穴には、先を尖らせた杭が中央に据え付けられ、これは「百合 lilium」と呼ばれます。「百合」の手前には、太く短い杭が無数に地面に埋め込まれ、この杭には2本の鉄の鉤が取り付けられました。これは「牛の突棒 stimulus」と呼ばれます。こうした防衛構造が、アレシア側と外側の両方に設置されます。

アレシアの堅固な城塞に対し、カエサルも堅固な包囲網を敷き、籠城軍と救援軍に備えます（図13）。

カエサルの決断　包囲軍と救援軍の双方に対して決戦を挑むこととした。

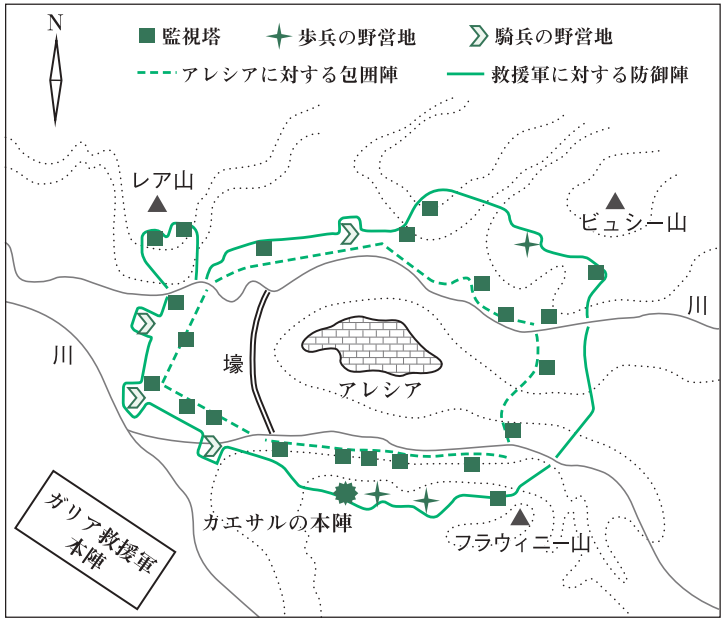

図13　アレシアの包囲網

経過

防御網を構築する頃には、カエサルの目論見通りに、アレシアの籠城軍は兵糧が不足し、城内に飢餓が蔓延します。籠城軍は降伏するか籠城を続けるか軍議を続けていましたが、ついにウェルキンゲトリクスの従兄弟ウェルカッシウェラウヌス率いるガリア救援軍がアレシアに駆け付けます。その数はおよそ33万。ここに、アレシアの戦いの火蓋が切られます。

まずは救援軍と包囲するカエサル軍の間で騎兵同士の会戦が生じます。ガリア救援軍は騎兵に散兵を交えて攻撃をさせたため、ローマ軍は苦戦しますが、カエサルが投入したゲルマン騎兵が奮起し、救援軍の撃退に成功します。その夜に、籠城軍はローマ包囲軍に夜襲をかけますが、ローマ軍が構築した「百合」や「牛の突棒」といった罠にかかり、ローマ軍もバリスタ ballista（弩砲）などで激しく反撃します。